

恩師井上和雄先生等について

山岳絵画を描くきっかけとなったのは、神戸商船大学経済学教授の井上先生との出会いによります。

経済学レポートの件で経済学研究室を訪ねた際、室内の絵についてお尋ねしたところ、ご自分で描かれた八ヶ岳であり、中学時代からの友人(吉田さん)と御岳、八ヶ岳、大山、桜島等を春・夏・秋と描いて回っているとのことであった。

その後の成り行きで、先生等の絵画旅行に同行させてもらえることになり、それをきっかけに、山を描くことになった次第である。

お二人は、15号、20号のキャンバスを1日1枚のペースで描かれるので、最初は、ペースについて行けずに苦労したが、次第に描けるようになった。

描く時の集中力とペース配分は、この頃身につけたものであり、また、お二人からは、いろいろなことを学ばせて頂いた。

お二人は、これまでに描かれた絵画及び随筆をインターネットブログ「[井上和雄 吉田脩二 美術館](#)」に掲載しておられますので、是非とも検索方願いたい。また絵画以外でもご活躍、著書も多数出版しており、井上先生の「モーツァルト心の軌跡」はサントリー学芸賞を受賞、関連する新聞記事も添付しますので、一読してみてください。

お二人の当時の経歴等は、次のとおりです。

井上和雄

神戸商船大学経済学助教授

大阪大学でのプラトン等「西洋哲学史」講義兼任

神戸モーツァルトクラブ会長

オーケストラ、合唱団における指揮及び指導

(モーツァルト レクイエム KV.618 指揮)

ブタコレラ・クワルテット(弦楽四重奏団) 第二ヴァイオリン演奏者

著書 中央公論社 モーツァルト懸賞において最優秀賞受賞

音楽之友社 「モーツァルト 心の軌跡」 サントリー学芸賞受賞

「ハイドン ロマンの軌跡」

「ペーターヴェン 闘いの軌跡」

「シューベルトとシューマン 青春の軌跡」

神戸新聞 「ロンドン音楽紀行」 ロンドン大学留学時の欧州見聞録等

吉田脩二

金沢大学医学部 立体視(3D 画像)の特許取得に貢献 イタリア学会での論文発表

大阪大学、大阪府立病院にて思春期外来・病棟 医学部長

毎日放送ラジオ番組 吉田脩二・角淳一「愛のおしゃべりクリニック」

著書 ミネルヴィ書房 「全能感人間」

高文研 「人はなぜ心を病むのか」 思春期外来の診察櫃から

鳥取県 大山にて



最終日、ペンション前の広場に作品を並べて、ペンションオーナーも交えての
展示鑑賞会。吉田・井上の両画伯は出来栄えに満足されたのでしょうか。

大学時代、音楽好きが四人集まり弦楽カルテットを結成した。「西にフタペスト、カルテットあれば東に……」と名づけた名前が「フタペスト・カルテット」。以来、大学を出て、銀行員、機械具販売業、大学教授、大阪フィルハーモニーの団員、とそれぞれ道を歩みながら三十四年、またカルテットは続いている。第二バイオリンを受け持つ井上和雄さんが、バイオリンと出会ったのは小学五年のとき。学芸会の合奏用に、にわか仕立てで仕込まれた。それを見かねた伯父が古道具屋のバイオリンを買ってきてくれ、近所のアマチュアに習うよう

井上 和雄 著

モーツァルト 心の軌跡

著書の周辺



しなやかな「モーツァルト論」

に。熱中し、専大を目指したが、父の猛烈な反対で神戸大に入り、経済学を学んだ。「挫折でした。プロの演奏を聴くと、くやしい思いをする」とがしばしば。自分ならはもっと良いものを表現できるのに、と。でも専大、カルテットをやっていた。やっぱり自分はプロの演奏家にはなれなかったとやっとなかりました。音楽をすること、人に聴かせることは別なんですね。そうしたアマチュアリズムの陶醉の演奏のなかで、モーツァルトの音楽は人生に

由がわからない。演奏体験をもとに、その両方を融合したかった。そこでは、モーツァルトの、女性への浮気っぽい面も、情念の豊かさも、音楽の豊かさに結びついた、としなやかなモーツァルト論が展開される。

フタペスト・カルテットの事は「メンパー」が一人も欠けずにいつまでも月一、二回の演奏を続けられることだけです。神戸商船大学経済学部教授。(U)友社刊・一、六〇〇円

ついて徐々に教えてくれた。「モーツァルトは天才です。でも初めから完成された天才ではなく、その年齢にふさわしい音楽を表現する天才であって、一歩々々、音楽が成長している。弦楽四重奏曲の流れを見ていると、それがよく分かります」。十四歳で作曲した第一番には、育ちの良い少年の楽観が見え、十六歳の作品では情熱の目覚め、そして以後、ハイドンの影響を受け、それを乗り越えていく音楽的意識が、一曲々々に刻まれている。父・レオポルトとの密着した父子関係などを追え、井上さんはフリーズの二つ一つから、教育論、男女の哲学まで導き出す。

オルフェ・ライブラリー シューベルトとシューマン 青春の軌跡
井上和雄著 (音楽之友社・2310円)

名曲を聴いてみたくなる



評・大野芳

(作家)

演奏家の立場から「読む音楽会」というのが成立するかどうか。著者の井上和雄が23年前に処女作『モーツァルト心の軌跡』を発表したとき、の感想である。それがサンクト・ペテルブルグで、読む音楽会の成立を見事に実証してみせた。井上は当時、神戸商船大学で教鞭をとる経済学者。一方、プロとアマによる弦楽四重奏団「フタペスト・カルテット」を主宰し、第二ヴァイオリンを担当する演奏家でもあった。同著は、カルテットの面々がモーツァルトの難曲に挑み闘争される彼方に見、徐々に成熟する心の軌跡を描いたもの。評論でもなく、アナリーゼの範疇にもおさまりにくい作品だった。その後、ベートーヴェン、ハイドンを、同じく弦楽四重奏曲を通して書き、音楽評論の分野に新機軸を築きあげた。

本書に取り上げたシューベルトとシューマンは、メンデルスゾーンやブラームスとともにロマン派と評される作曲家である。音楽が宮廷や教会から中産階級のもとに移り、古典派の形式を継承しながら自己の感情を切々と露わにあげた時代であった。シューベルトは、もっとも詩情豊かな歌曲の王と呼ばれたが、井上は弦楽四重奏曲「ロザムンデ」を冒頭に挙げ、へどこか諦めをにおわすものがあり、あるいはひ弱ささえ感じさせる」と評する。そして大人になるのを拒否したシューベルトは、その詩意とひ弱さを美しく歌うことによってシューベルトになったという。このときシューベルトは、27歳。死の5年前である。青年の心をもち続けるのは、八當時としては希有なことと書く。シューマンでは、ハート二つの音が交わるたびに後髪を引かれながらも前に進んでいくような趣きとが、八編が立ちこめたような世界を出現」といった表現を効いて貴公子シューマンの雄力を語る。井上は、楽曲を演奏して読み解き、古今の批評家に真向から挑むかと思えば、感傷に近い陶醉ぶりでもふたりの作曲家の青春像を描いている。井上流に料理された名曲の数々を、もう一度聴いてみたくなる不思議な本である。

